悪魔の宿屋

コルシカ島

昔むかしのことです。

あるとき、悪魔の父親は考えました。

「地上には、道がひとつあって、そこをたくさんの旅人が行ったり来たりしている。これを、好奇心街道というんだが、ひとつそこに宿屋をたてて、息子をふたりそこに行かせて、宿屋をやらせよう。ただし、息子たちをうんと醜い顔にしてやるんだ。うんと醜くして、そこを通る者がだれでも『いったい何をしでかしてそんな顔になったんだ』と聞くほど、醜くしておこう」

悪魔は、ふたりの息子を呼びよせて、ふたりの鼻をなぐってへし折り、耳を片方ひき裂き、額におそろしいできものを作りました。そうやって醜くしてから、息子たちにいいました。

「いいか、おまえたちは、地上に行って、好奇心街道で宿屋をいとなむんだ。そして、おまえたちに同情して、『どうしてそんな顔になったんだ』と聞くようなやつを、みんなこの地下の国に送ってよこせ。おまえたちのことなど全然気にしないで通りすぎていくしたたかなやつを見つけるまでは、ここにもどって来ちゃならんぞ」

悪魔の息子たちは出かけて行きました。

宿屋では、悪魔の息子たちを見て、同情しないで通りすぎていく旅人はいませんでした。そして、「おまえたち、どうしてそんな顔になったんだ」とたずねようものなら、たちまち、つえで打ちのめされ、細かく切りきざまれて、つぎに来る旅人の食べ物になってしまいました。千年もの間、悪魔の息子たちは、人間たちを地獄へ落としつづけました。

そのころ、とても貧しい女がいました。持っているものをみんな売ってしまうと、手元には、四十五フランしか残りませんでした。女は、一番上の息子に、十五フランわたして、いいました。

「おまえ、これを持って旅に出て、しあわせをさがしておいで」

息子は、出かけ、好奇心街道を歩いて行きました。そして、やがて、あの悪魔の宿屋に着きました。お腹が空いたので、宿屋に入って行きました。そして、悪魔の息子たちを見ると、息子は心を動かされて、

「あなたたちは、どうしてそんなひどい顔になったんだい」とたずねました。たちまち、息子はつえでなぐり倒されてしまいました。

しばらくして、母親は、二番目の息子に、十五フランわたしていいました。

「おまえ、これを持って旅に出て、しあわせをさがしておいで」

息子は、出かけて行き、好奇心街道を歩いて行って、悪魔の宿屋に着きました。息子は悪魔の息子たちに、

「あなたたちは、どうしてそんなひどい顔になったんだい」とたずねました。そして、たちまち、つえでなぐり倒されてしまいました。

やがて、母親は、末っ子のアントナレロに、十五フランわたしていいました。

「おまえ、これを持って旅に出て、しあわせをさがしておいで」

アントナレロは出かけて行きました。

歩いていると、美しい女の人に会いました。

「アントナレロ、どこへいらっしゃるの」と、女の人はたずねました。

「しあわせを探しに行くんです」

「あなたは、まだ若すぎる。しあわせを探すには、いろいろ経験して、人間のおろかな気まぐれも知っていなければならないの。それでもなかなか探し出せるものじゃないわ」

「じゃあ、しあわせを探し出すのに、いちばん必要なものってなんでしょう」

「いちばん必要なことは、あなたの持っている十五フランで、わたしから、三つの忠告を買うことです」

アントナレロは、

「ぼくは、よろこんで買うよ」といいました。女の人は、

「では、最初の忠告はこうよ。『新しい道のために古い道をすててはいけない』。ふたつ目も聞きたい？」

「ええ！」

『よその人のことに頭をつっこまない』

「三つ目の忠告も、聞かせてください！」

『見ざる、聞かざる』

「ありがとうおばさん。はい、十五フランです」

アントナレロは、また歩いて行きました。ところが、ポケットに手をつっこんだとき、前よりも三倍もたくさんお金が入っていたので、すっかりおどろいてしまいました。

「これは奇跡だ」と、アントナレロは、思いました。

しばらく行くと、とてもきれいな道に出ました。

「この道を行こうかな」と、アントナレロは、考えました。けれども、そのとき、最初の忠告を思い出しました。

『新しい道のために古い道を捨ててはいけない』だよな」

アントナレロは、そのまま古い道を歩いて行きました。じつは、新しい道には、盗賊たちが隠れていて、そこを通る人たちをおそっていたのでした。

二、三日歩いて行くと、ふたりの男の人が、おたがいに鞭でなぐり合っているのに出会いました。

「何とかしてあげなくちゃ」と、アントナレロは、考えました。けれども、ふたつ目の忠告を思い出しました。

『よその人のことに頭をつっこまない』

アントナレロは、黙ってそばを通りすぎました。もし声をかけていれば、小さなアントナレロは、争いにまきこまれて殺されてしまったことでしょう。

それからまた何日も歩いて行くと、あの悪魔の宿屋に着きました。

「ひどくお腹が空いてるんだけど、何か食べ物はないかしら？」

「お好きなものを何でも」と、悪魔の息子たちはいいました。アントナレロは、すばらしいごちそうを、たっぷり食べて、たっぷり飲んで、お金をはらって宿屋を出ました。悪魔の息子たちは、うなりながら追いかけて来て、いいました。

「おまえは、おれたちのことを気にとめないで行ってしまうのか」

アントナレロは、

「ぼくは、よその人のことに頭をつっこまないし、場合によっては、『見ざる聞かざる』なんだ」と答えました。

悪魔の息子たちは、手も足も出ませんでした。負けを認めて、宿屋に火をつけました。そして、怒りで口にあわをいっぱいふきながら、地下の国に帰って行きました。悪魔の父親は、ぶつぶつ文句をいいました。そして、じきに、好奇心街道の別の通りに宿屋を建てて、息子たちを行かせました。なかなか繁盛しているそうですよ。

アントナレロは、自分の道をどんどん進んで行きました。アントナレロがしあわせを見つけたかどうか、わたしは知りません。けれども、きっとあの三つの忠告をうまく使えば、近いうちにしあわせにめぐりあうことでしょう。

村上郁再話

資料『世界の民話13 地中海』小沢俊夫編訳